



近現代英語における2音節形容詞の比較形式の使用推移

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2008-05-21 キーワード: 作成者: 福田, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005637

近現代英語における2音節形容詞の比較形式の使用推移

福 田 薫

北海道教育大学函館校言語科学研究室

A Corpus-Based Analysis of Comparative Forms of Disyllabic Adjectives in Modern and Present-Day English

FUKUDA Kaoru

Department of Linguistics, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

概 要

近現代英語の大規模コーパスを準備し、2音節形容詞の比較形式を検索して、屈折比較と迂言比較の使用比率の推移を調査する。検索結果の集計と統計的解析に基づき、比較形式の使用比率の推移に関し、近年における迂言比較の増加と、近現代を通じての比較形式選択の両極分化という傾向を指摘する。加えて、比較形式の選択に関わる要因として形容詞語末音の音声的条件だけでなく、比較対象の明示、比較の程度を表す修飾語、叙述用法など、比較そのものを焦点化する文脈が迂言比較の使用を促進させることを実証する。

1. はじめに

段階的な性質や状態を表す形容詞や副詞は、比較形式（原級、比較級、最上級）を用いて程度の比較が可能である。比較形式には、屈折比較（inflectional comparison）と迂言比較（periphrastic comparison）の2形式がある。屈折比較は、原級に屈折接辞の -er, -est を付け、一方、迂言比較は、原級の前に more, most を付ける。中尾・児馬（1990：13）によると、屈折比較はOEからの発達であり、一方の迂言比較は13世紀以降使われだした。

2種類の比較形式の使い分けは、現代英語では形容詞の長さによって決まる。すなわち、1音節の短い語では屈折比較、3音節以上の比較的長い語では迂言比較が使われる。中間的な長さの2音節語の場合、その音韻的、形態的特徴に応じて、相当程度の揺れが見られる。Quirk *et al* (1985), 八木 (1987), Biber *et al* (1999) など多くの研究によれば、おおよその傾向として、語末の音が半母音 [y], [w], 成節的な [l], [əʳ] を含むときに屈折形がよく使われるという。Quirk *et al* (1985) は, common, solid, polite, pleasant, handsome などいくつかの形容詞では両方の形式が可能であるが、現在では迂言形の使用が増えつつあることを指摘している。福田 (2006) はBNCコーパス調査によって現代英語において迂言比較の使用が拡大する傾向を確認している。

中尾・児馬（1990：13）では、形容詞の比較形式選択の史的推移に関して、MEでは屈折比較が優勢であり、初期近代英語では単音節でも迂言比較、2音節以上でも屈折比較が用いられており、現代英語に見られる比較形式選択の慣用は18世紀以降のものであると述べている。そこで本論では、コーパス言語学の手法を用いて、近現代英語で書かれた大量のテキストをコンピュータで検索することを通して、形容詞、特に2音節形容詞の比較形式の選択に関する歴史的な推移を計量的に調査、分析することにする。その結果として、PEにおける迂言比較の拡大および比較形式選択の両極化の進行が観察されることを指摘する。

以下、第2節では調査分析の対象と方法について述べる。第3節では調査の結果から全体的な推移の傾向を分析するとともに、比較形式の選択の際に働く要因について考察する。第4節は結論である。

2. 方 法

2. 1 調査対象

近現代英語における比較形式の使用動向を数値的に調査するには、その当時に書かれたテキストを検索することが不可欠の作業となる。しかも、統計的に見て信頼の置けるデータをうるには、十分に大きな量の言語テキストを用意しなければならない。幸運なことに、著作権が切れた古典作品や、著者が著作権を放棄したテキストがWEB上に多数公開されており、だれでもが自由に作品を読んだり、研究用に利用することができる。たとえば、Project Gutenberg というサイトには、現在、49以上の言語で書かれた18,000点以上の電子化されたテキストが公開されている。今回の調査ではこのサイトからダウンロードした英語テキストを利用することにした。

収集したテキストをコーパスとして利用するためにはいくつかの作業が必要となる。まずテキストから本文以外の部分を除去し、次に、テキスト本文を整形して検索しやすい形式に加工する。同時に、これらのテキストに関する諸情報を可能な限り入手して、Gutenberg コーパスのデータベースを作成する。¹ テキストの執筆年は今回の調査では特に重要となるが、主に著者（翻訳作品の場合は翻訳者）の生没年に基づいて推定する。最終的に、執筆年を確定または推定できた10,498テキストを調査の対象とすることにする。²

Project Gutenberg から入手できるテキストの大部分はすでに著作権の消失した作品である。他方、1951年以降のテキストは著作権の関係で十分な量を確保できない。そこで、止むを得ず、20世紀後半の現代英語の資料としてBNC コーパスを利用することにする。³ 表1は、調査対象となったテキストの数とサイズ（単位はMB）の内訳を示す。⁴

表1 対象テキストの内訳

	初期近代英語		後 期 近 代 英 語		現 代 英 語	
	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
ファイル数	423 2.9%	422 2.9%	1,845 12.7%	4,935 33.9%	2,873 19.7%	4,054 27.9%
ファイルサイズ	122.8 2.8%	172.3 4.0%	734.7 17.0%	1767.5 41.0%	964.6 22.4%	552.8 12.8%

2. 2 方 法

この節では検索調査と集計解析の手順を簡単に述べる。まず、比較構文で使用可能な2音節形容詞372語を調査項目として選定した。該当する語を網羅しているわけではないが、重要と思われる語をカバーしてい

る.⁵

次に、検索を実行するプログラムを作成し、整形済みの Gutenberg テキスト群および BNC コーパスに対し検索を実行した。⁶ 検索結果は、検索語とその前後文脈を含む KWIC (Key Word in Context) 形式で出力される。⁷

```
( GutenEngText\frit110.txt )
f the lake and the landscape around it; never an { uglier } one than that of this idle and decaying
( GutenEngText\12369.txt )
rally conclude that Holland was inhabited by the { ugliest } and most ill-mannered people on the ear
( GutenEngText\cphil110.txt )
h an out-spoken opinion even from the oldest and { ugliest } of her sex; and I was only too glad to
( GutenEngText\1111m11.txt )
igns to receive. So here I am, with three of the { ugliest } attorneys that ever deserved to be tran
( GutenEngText\14684.txt )
ere nature writers, I wud use a much shorter an' { uglier } wurrud thin liar, if I cud think iv wan,
( GutenEngText\spbd10.txt )
rs were borne forward by porpoise-shaped fiends, { uglier,} if possible, than Lucifer himself. And
( GutenEngText\11490.txt )
they live together as man and wife. She was the { ugliest } wench I ever saw, and, if possible, he
( GutenEngText\tpohs10.txt )
w's way with 'em all: the prettier they was, the { uglier } he were to 'em. Pew's way: a way he had
( GutenEngText\8dlee10.txt )
hief of police.' _Police_! -- that is one of the { ugliest } words in the language, general! Some pe
( GutenEngText\cthrn10.txt )
aggy, and with hair like tow? Was not Wilkes the { ugliest,} charmingest, most successful man in th
( GutenEngText\13277.txt )
while its second flung her into the arms of the { ugliest,} fattest man present and whirled her po
```

図1 KWIC 形式の検索結果の例

次の段階では、各 KWIC 行に付けられた出典ファイル名をキーにして照合し、データベースからそのテキストの執筆年を割り出す。その値に基づいて、各形容詞について屈折比較形の使用頻度 freq (E) と迂言比較形の使用頻度 freq (M) を集計する。また、これらの使用頻度を加算し、年代別の頻度合計を求める。

次に、(1)の式により、差異係数 (difference coefficient) を算出する。

$$(1) DC = \frac{freq(E) - freq(M)}{freq(E) + freq(M)}$$

差異係数は、2つの比較形式の使用頻度の偏りの程度を表し、屈折形が多ければ正の値、逆に迂言形が多いと負の値、両者が同頻度のときは0になる。差異係数は使用頻度の偏り具合を-1から+1の範囲で数値化するので、使用頻度の異なる語同士や年代同士でも比較が可能となる。この性質を利用して、2つの比較形式の使用比率の推移を分析することにする。

3. 結果と考察

近現代英語のコーパスとして Gutenberg コーパスを構築し、BNC コーパスと合わせて調査対象とした。主要な2音節形容詞372語の屈折形と迂言形を検索し、それぞれの使用回数を調査した。この節では、調査結果を提示するとともに、結果を数値的に解析することにより、歴史的な推移の傾向を考察していきたい。

3. 1 使用頻度総数と相対頻度

検索の結果、2音節形容詞の比較形式全体では407,315の使用例が見つかった。このうち、屈折比較形は239,287例(58.7%)、迂言比較形は168,028例(41.3%)であるから、出現頻度では屈折比較の方が上回っ

ている。これは、early, easy, happy, noble, simple, heavy, pretty などの屈折比較形が高頻度で使われるためである。迂言比較形で最も使用回数が多いのは likely であるが、early の約 4 分の 1 に過ぎない。

表 2 は、2 つの比較形式の使用総数を年代区分ごとに集計し、その相対頻度を示している。

表 2 比較形式の使用総数と比率の推移

	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
屈折比較	4,043	7,503	38,508	102,871	51,379	34,983
	42.7%	43.4%	54.9%	62.1%	62.4%	56.0%
迂言比較	5,415	9,782	31,584	62,760	31,020	27,467
	57.3%	56.6%	45.1%	37.9%	37.6%	44.0%

使用総数の比率の推移を見ると、18世紀までは迂言比較が優勢であったが、屈折比較が次第に多く使われるようになり、19世紀以降は屈折比較の方が優勢となっている。しかし、20世紀後半になると、迂言比較の割合が増加している。これが真に増加と言えるかどうかについて母比率の差を検定してみると、 $z_0 = -15.57$ となり、0.1%レベルで有意という結果を得た。BNC コーパスにおける迂言比較の使用増加に関しては、以下の節でさらに詳しく分析することにする。ここでは、迂言比較の使用増加が統計的に有意と判定されることと、その現象がまさに現代英語において進行中であることを指摘しておきたい。

3. 2 使用比率の平均

2音節形容詞372語の比較形式の出現回数を年代ごとに集計し、屈折比較の頻度と迂言比較の頻度から差異係数を算出した。末尾に付した資料は、調査項目ごとに年代別の使用比率（差異係数）の値と χ^2 乗適合度検定の結果を掲載している。⁸

表 3 は年代区分ごとの差異係数のデータ数と平均値および標準偏差を算出したものである。

表 3 差異係数の平均値の推移

	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
データ数	130	150	248	295	281	237
平均	-0.34	-0.41	-0.26	-0.13	-0.09	-0.21
標準偏差	0.55	0.61	0.66	0.69	0.73	0.80

どの年代区分においても差異係数の平均が負の値をとっていることが注目される。すなわち、今回調査した形容詞を見る限り、迂言比較の方がよく使われる形容詞の数が多いのである。

図 2（次頁）は差異係数の平均値の推移を図示したものである。

図 2 を見ると、18世紀から20世紀前半にかけて平均値が徐々に上がっている。しかし、20世紀後半の BNC コーパスでは、屈折比較の使用比率が増加から一転して減少に転じている。これは、迂言比較の使用総数の増加（表 2）とともに、迂言比較を使う 2音節形容詞の種類も増えたことを意味している。

差異係数の平均値に関して年代間で有意差があるかどうかを検定するために分散分析を行った。⁹ 分散分析の結果、観測された分散比は $F_0 = 6.14$ 、その上側確率は $\Pr(F \geq 6.14) = 1.23E-05$ であり、0.1%レベルで有意と認められた。この検定結果を受けて、テューキー・クラマー法を用いて多重比較を行った。その結果、0.15以上の平均値差が見られる年代間に 5%レベル以上の有意差があると認められた。しかし、20世紀

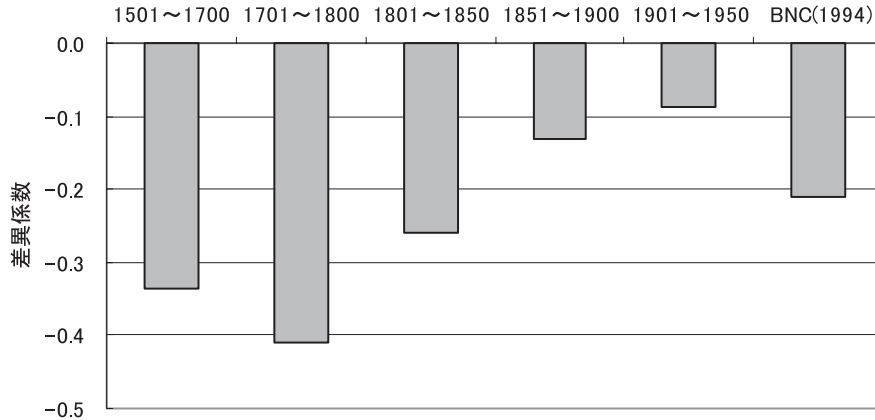


図2 使用比率の平均値の推移

前半と後半の平均値差は0.12であるため、有意とは言えないという判定になった。

3.3 2音節形容詞の語末音

この節では、語末子音に基づいて2音節形容詞を下位分類し、グループごとの差異係数の推移を調べる。そして、迂言比較の使用拡大とどのように関係しているかを分析することにする。

まず、語末の子音に基づき、2音節形容詞を(2)のように、6つのグループに分類する。¹⁰

- (2) a. 半母音 [y] または [w] で終わる語
early, easy, busy, happy, heavy, pretty, wealthy, narrow, hollow, shallow など
- b. 成節的な [l] で終わる語
simple, gentle, humble, noble, able, stable, subtle, nimble など
- c. 非成節的な [l] で終わる語
mobile, hostile, evil, tranquil, novel, formal, normal, vital, royal など
- d. 流音 [əʳ] で終わる語
severe, aware, secure, mature, clever, bitter, obscure, slender, sober, tender など
- e. 鼻音の [m] または [n] で終わる語
common, often, modern, open, extreme, human, handsome, solemn, stubborn など
- f. その他の阻害音で終わる語
recent, remote, pleasant, polite, profound, stupid, opaque, intense, perverse など

それぞれの下位グループの年代ごとの差異係数を示したのが表4である。図3は差異係数の推移を図示したものである。

結果を見ると、半母音や成節的な [l] で終わるグループで屈折比較がよく使われることがわかる。語末半母音のグループは屈折比較の使用率がますます上昇しているのに対し、成節的な [l] で終わるグループは20世紀後半になって屈折比較の使用が激減し、迂言比較優勢に変化している。それ以外のグループではもともと迂言形が優位であったが、最近その傾向が顕著になってきている。近現代英語を通して末尾音のグループの順位にほとんど変動が見られない。このことから、音韻的な条件が重要な要因として働いていると考えられる。

表4 語末音グループ別の差異係数の推移

	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
半母音[y, w]	-0.01	-0.06	0.17	0.33	0.44	0.48
成 節 的 [l]	0.14	0.14	0.32	0.34	0.32	-0.15
非成節的 [l]	-0.86	-0.90	-0.91	-0.92	-0.92	-0.94
流 音 [r]	-0.26	-0.19	-0.26	-0.19	-0.26	-0.53
鼻 音[m, n]	-0.46	-0.46	-0.54	-0.50	-0.56	-0.94
阻 害 音	-0.61	-0.68	-0.67	-0.63	-0.64	-0.76

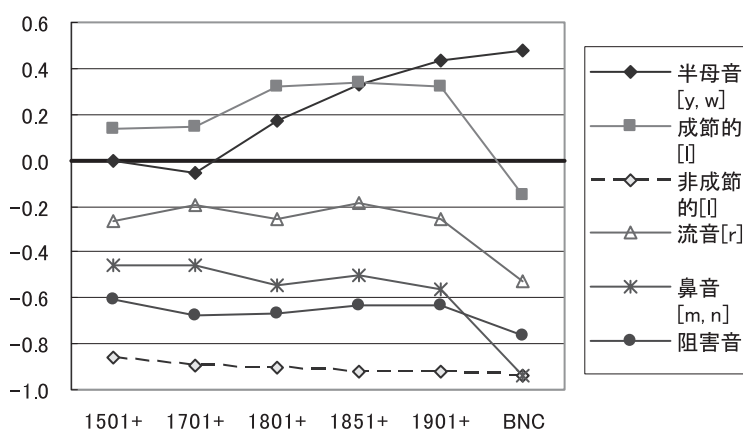


図3 語末音グループ別の差異係数の推移

それでは、語末音の種類が比較形式の選択とどのように関係しているのかを考えてみたい。図3から、半母音、成節的 [l] や [r]，その他の子音の順で迂言比較の使用が高いと言えるが、これは子音の聞こえ (sonority) の順序と符合する。なぜこのような関係が生じるのであろうか。屈折比較を作る -er,-est は1音節の接尾辞であり、通常、語強勢を受けることがないという意味で、音声的にはあまり目立たない要素である。それでも、long, long-er, long-est のように、1音節形容詞に付加されるときには全体で2音節のうちの1音節を占める。しかし、3音節以上の形容詞に付加される場合には、接辞の存在感が相対的に薄れていく。これに対し、迂言比較の more, most は強勢を担いうる独立語である。そのため、多音節形容詞に埋没することなく比較の機能を担いうる。屈折比較はコンパクトであるが、迂言比較は明示的な比較標識として働く。これが、特定の状況において迂言形を選択する大きな動機となると言える。¹¹

2音節形容詞の場合はホストと接辞の音節数比率は微妙な関係にあって決定的要因となりえない。このため、2音節語以外ではあまり重要ではない、語末音の性質が鍵を握る要因として浮上してくる。すなわち、聞こえ度の高い語末音は、それに付加される屈折比較の目立たなさを補完すると考えられる。その点で、半母音 [y], [w] は他の子音よりも屈折比較を使う音声的条件が整っている。語末の成節的 [l] は接辞がつくと成節的ではなくなるが、sim-ple, sim-pler, sim-plest のように、接辞がついても2音節のままである。音節数の比率からすると、接辞は1音節語に付加されたのと変わらない。これに対し、その他の子音、特に阻害音で終わる2音節形容詞に屈折接辞が付くときは、接辞が十分な音声的際立ちを確保できない。それゆえ、比較であることを明示するために、迂言比較が好まれるのであろう。

3. 4 比較が強調される文脈

前節では、屈折比較が音声的な際立ちを確保しにくい状況で迂言比較が好んで使われることを論じた。この節では、音声的な条件以外にも、比較の明示形としての迂言比較が好まれる状況があるかどうかを考察する。比較対象の明示、比較程度の明示、叙述用法という要因が2音節形容詞の比較形式の選択にどのように影響するかを分析する。

3. 4. 1 比較対象の明示

八木 (1987) は、比較対象を明示する than を伴う文脈では迂言比較が好まれるという興味深い観察をしている。意味的に見ると比較構文は2つの項を必要とするから、than 以下によって比較対象が明示されていれば、そうでない場合に比べて、比較の意図がより鮮明になる。

- (3) a. The commonest case for counsel, and more common here than anywhere else, is where a man is to build for himself a house, especially in the country, ...

(*The Atlantic Monthly*, Volume 10, No.60, October 1862)

「ご相談を受けるもっともありふれたケース、つまり他のどんなケースよりもよくあるのは、男の人がご自分のための家を、特に田舎に建てようとなさる場合です。」

- b. These are all wild fowl. The commoner varieties will cost from six to fifteen dollars a pair and the rare ones several hundred. (C. Miller (1911) *Outdoor Sports and Games*)

「こちらはみな野生の鳥です。ありふれたものは番いで6~15ドル、めずらしいものなら数百ドルの値段になります。」

このように比較対象を明示することにより、比較そのものに一種の際立ちが与えられる場合は、明示的比較形式である迂言形が適していると考えられる。

そこで、2音節形容詞の比較級が使用される例を検索し、比較級と than 表現の共起関係を調査した。表5は、屈折形や迂言形の比較級の右側4語の範囲に than が出現する用例の割合を年代ごとに集計した結果である。

表5 2音節形容詞の比較級と than 表現の共起

	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
屈折比較	426/2,010 21.2%	785/3,574 22.0%	4,229/19,453 21.7%	11,280/55,424 20.4%	5,709/29,864 19.1%	2,175/28,009 7.8%
迂言比較	607/2,702 22.5%	1,131/4,853 23.3%	3,949/16,955 23.3%	8,619/35,551 24.2%	4,364/18,551 23.5%	2,574/18,274 14.1%

表5から、どの年代区分においても迂言比較の方が than 表現と共起する率が高いことが見てとれる。¹²この調査結果に基づき、than 表現の有無が比較形式の選択と関係があるかどうかを χ^2 乗独立性検定により検定を行った。その結果、 $\chi^2_0=622.60$ となり、有意水準0.1%レベルで有意であると判定される。つまり、than 表現により比較の対象が明示される文脈では迂言比較が好まれると言える。

3. 4. 2 比較程度表現

比較級や最上級が程度を表す副詞語句によって修飾されることがある。たとえば、比較級は much, far, even, still, a lot, a bit, rather, ever などによって修飾されうる。また、最上級を修飾する表現とし

ては much, (by) far などがある。

- (4) a. ... so you may smile upon him with your sweetest smiles this afternoon, and send him back to me even happier than he goes. (J. Austen (1775-1817), *Mansfield Park*)

「今日の午後あなたはあの人にこの上なくやさしく微笑みかけられて、きっと、出かけたときよりもさらに幸せな気分ですら帰らせてくださることでしょう。」

- b. This woman seemed even more ready to attempt something which might get her out of that confinement than either Hawes or her other companion.

(A. Hayward (1735), *Lives of the Most Remarkable Criminals Who have been Condemned and Executed for Murder*)

「監禁状態を脱することができるとなればヘイズやその連れよりもさらにこの女の方が何かをしでかしように見えた。」

- (5) a. Werner was by far the busiest of those waiting in the stifling heat beneath the glass roof.

(G. Richmond (1866-1959), *The Second Violin*)

「ガラス屋根の下、息の詰まりそうな暑さの中で並んで待っている人たちの中では、ワーナー氏が断然忙しい人であった。」

- b. The Bell Rock this morning presented by far the most busy and active appearance it had exhibited since the erection of the principal beams of the beacon.

(R. Stevenson (1850-1894), *Records of a Family of Engineers*)

「この日の朝ベル・ロックは主要な色を出す灯台が建てられて以来ずば抜けて慌しくかつ賑やかな表情を見せた。」

このような構文もまた程度の差を明示することにより比較そのものに強調が置かれている文脈の一つである。前節と同様に、比較級や最上級の直前3語の範囲内に程度表現が生じる用例を検索し、屈折比較と迂言比較ごとに集計した。表6と表7はその調査結果をまとめたものである。

表6 2音節形容詞の比較級と程度表現の共起

	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
屈折比較	168/2,010 8.4%	373/3,574 10.4%	1,743/19,453 9.0%	4,699/55,424 8.5%	2,529/29,864 8.5%	2,320/28,009 8.3%
迂言比較	192/2,702 7.1%	496/4,853 10.2%	2,016/16,955 11.9%	4,490/35,551 12.6%	2,378/18,551 12.8%	2,399/18,274 13.1%

表7 2音節形容詞の最上級と程度表現の共起

	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
屈折比較	0/2,033 0.0%	12/3,929 0.3%	75/19,055 0.4%	131/47,447 0.3%	76/21,515 0.4%	27/7,053 0.4%
迂言比較	6/2,713 0.2%	16/4,929 0.3%	52/14,629 0.4%	108/27,209 0.4%	49/12,469 0.4%	75/9,193 0.8%

この調査結果に基づき、比較形式の選択と程度修飾表現の有無の関連について χ^2 乗独立性検定を行った。比較級の場合は $\chi^2_0 = 903.01$ となり0.1%レベルで有意であると判定される。また、最上級の場合は $\chi^2_0 = 14.54$ となり、同様に0.1%レベルで有意と認められる。これらの結果から、比較形式が程度表現によって修飾される文脈においても、迂言比較が好まれる傾向があると言える。

3. 4. 3 限定用法と叙述用法

形容詞の原級と同様に、比較級や最上級も、名詞を修飾する限定用法と be 動詞などの補語となる叙述用法がある。八木 (1987) によれば、叙述用法において迂言比較が好まれる傾向があるという。限定用法では名詞が句の中心となるのに対し、叙述用法ではそのような名詞が存在せず、形容詞が構造的にも意味的にも句の中心である。形容詞自身にスポットが当たっている叙述用法では迂言比較が生じ易いと予想される。¹³

そこで2音節形容詞の比較形式の検索結果に対し、その中に含まれる叙述用法の割合を調査した。¹⁴ 表8はその調査結果を示したものである。

表8 2音節形容詞の比較形式と叙述用法の使用頻度

	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
屈折比較	248/2,010	608/3,574	2,774/19,453	9,877/55,424	5,725/29,864	3,560/27,930
	12.3%	17.0%	14.3%	17.8%	19.2%	12.7%
迂言比較	621/2,702	1,332/4,853	4,121/16,955	9,785/35,551	5,129/18,551	6,128/18,274
	23.0%	27.4%	24.3%	27.5%	27.6%	33.5%

どの年代においても叙述用法では迂言比較の割合が明らかに高い。実際、 χ^2 乗独立性検定により検定を行うと、 $\chi^2_0 = 4507.46$ となり、0.1%レベルで有意と判定される。叙述用法では形容詞が重要な情報を担うと考えられ、ここでもまた迂言比較の形式が好まれると言える。

3.4.2節で述べたように、2音節形容詞のうち-yで終わる語では一般に屈折比較が優勢である。しかし、末尾の資料において個別の形容詞の動向を見てみると、likely, costly, guilty, ready, worthyなどは逆に迂言比較が優勢になってきている。同様に、成節的な[1]で終わる2音節形容詞の多くは屈折比較が使われる傾向があるが、stable, subtleなどのように迂言比較が優勢になってきている語も見られる。音韻的な条件が同じであるにもかかわらず、なぜこれらの形容詞はグループの傾向と逆の傾向を示すのだろうか。BNCコーパスにおいてこの傾向が顕著に観察されるので、BNCコーパスを対象としてこれらの形容詞の迂言比較の使用総数と叙述用法の出現数を調べた。

表9 いくつかの形容詞の迂言比較と叙述用法の使用数 (BNCコーパス)

likely	costly	guilty	ready	worthy	stable	subtle
2,331/2,343	29/32	5/6	29/37	12/13	50/50	66/81
99.5%	90.6%	83.3%	78.4%	92.3%	100.0%	81.5%

表9から、これらの形容詞は叙述用法の際には圧倒的に高い割合で迂言形が使われることがわかる。これらの形容詞では音韻的条件よりもむしろ意味的な要因が比較形式の選択に強い影響を及ぼしているように見える。¹⁵

3. 5 両極化の進行

この節では2音節形容詞の比較形式の使用比率に関して、差異係数のばらつきの大きさ、すなわち標準偏差が示す傾向を考えてみたい。3.2節の表3から、差異係数の標準偏差の値が徐々に増加しているのが分かる。このことは、差異係数の絶対値が年代とともに大きくなっていることを意味する。図4は、差異係数の絶対値を0.2刻みで5つに分け、それらの分布状況の推移を示している。

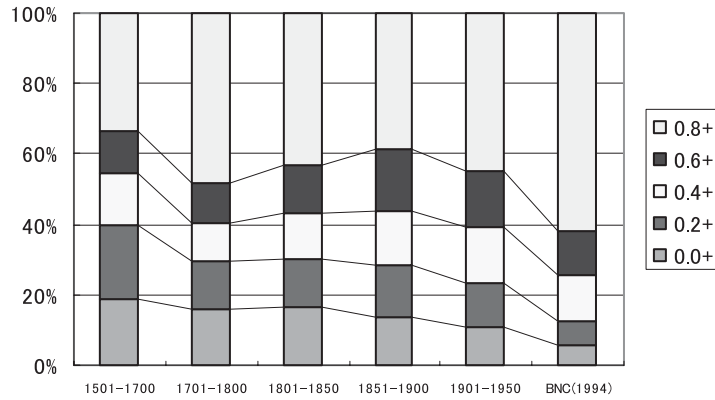


図4 差異係数の絶対値クラスの分布

図4から、絶対値が0.4未満の形容詞の割合が漸減し、対照的に、絶対値0.8以上の形容詞の割合が増えてきているのがわかる。特に、20世紀後半のBNCコーパスにおいてこの傾向が顕著である。言い換えると、年代を経るにつれ、各形容詞の比較形式が屈折比較か迂言比較のどちらかに固定化、両極分化が進んでいるということである。

上で述べた全体的傾向は、2音節形容詞の語末音グループごとの差異係数の推移によっても確認できる。3.3節の図3を見ると、年代が下がるにつれ、6本の折れ線の間隔が徐々に開いていくのが観察される。特に、20世紀後半において両極分化の傾向が顕著に見られる。

4. 結 論

本論では、コーパス言語学の手法を用いて、2音節形容詞が屈折比較と迂言比較のうちどちらの形式をとるのか、その使用比率の推移を調査し、傾向の抽出を試みた。16世紀から現在に至る約500年間にわたる大量のテキストを調査した結果、次の2つの全体的傾向を指摘できる。第1点は、20世紀前半までは屈折比較の使用が緩やかに増加していたが、20世紀後半には一転して迂言比較の使用が拡大している。この傾向は近現代英語の流れの中ではすぐれて現代的な現象であると言える。第2点は、2音節形容詞のうち半母音で終わる語では屈折比較がますます優勢になる一方で、それ以外の形容詞類では逆に迂言比較が顕著に優勢になってきている。つまり、形容詞のとり比較形式がどちらか一方に固定化、両極化する傾向が進行している。

本論ではまた比較形式の選択に関わる要因を検討し、比較そのものになんらかの重点、強調が置かれる文脈では、その際立ちに適した形式を備えている迂言比較が好んで使われることを指摘した。特に、比較対象を明示するthan表現の存在、比較の程度を明示する修飾表現の存在、および形容詞が述部主要部として働く叙述用法などの要因が迂言比較の使用を促すことを明らかにした。

本論の議論はコーパス検索を通して得られたデータの分析に基づいている。近現代英語の大規模コーパスとしてGutenbergコーパスを構築し、それを検索してデータを集計し、その結果に統計的解析を加えている。

本論での主張が経験的妥当性を持ちえているかどうかはさらに検証する必要があるとしても、コーパスを利用した研究の有効性と可能性の一端を示すものとなる。コーパス分析で得られた実証的成果は、各種辞書の記述などに今後も積極的に活用されるべきである。

注

本稿は、2006年6月10日北海道教育大学函館校において開催された平成18年度函館英語英文学会において口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。学会参加者からいただいた有益な助言と意見に感謝したい。

1. データベース化した情報は、テキスト番号、ファイル名、テキスト名、著者名と生没年（翻訳作品の場合は翻訳者の生没年）、図書分類とテーマによるジャンル分け、使用言語、ファイルサイズなどである。これらの情報を、一つのテキストファイルに集録し、情報の検索等が出来るようにした。コーパスの構築、検索の実行、統計解析の意義など、コーパス言語学の手法に関する解説は齊藤・中村・赤野（1998）が参考になる。
2. 著者の生年と没年の中間をテキストの執筆年とみなすことにした。また、著者の生年か没年の一方が不明の場合は既知の年から30を加減した年を執筆年とみなした。生没年データが得られないときは、テキスト内に出版年、あるいはそれに類する記載があればそれを執筆年とみなした。結果的に、この作業にもっとも多くの時間と労力を費やすこととなった。このようにして執筆年を推定、確定できたテキストは、13,626中10,498テキスト（77.0%）である。
3. 1951年以降に執筆されたと確定または推定できるテキストは82テキストで、収集した13,626テキストのうちの0.6%に過ぎない。これに対し、BNCコーパスは1994年にBNC Consortiumにより編纂された現代イギリス英語のコーパスで、4,054のテキスト（world edition）を含み、総語数約1億語のサイズを誇る。コーパスの規模だけでなく、編纂方針、入手のし易さなどの点から、信頼度の高い現代英語のコーパスとして定評がある。BNCコーパスの紹介と利用方法については、アシュトン&バーナード（2004）を参照。
4. GutenbergコーパスBNCコーパスとでは、コーパスを構成するテキストの種類、割合、サイズなどの点で、到底同質とは言えない。特に大きく異なるのは次の3点である。第1に、BNCコーパスはイギリス英語だけであるのに対し、Gutenbergコーパスにはアメリカ英語なども含まれている。第2に、BNCコーパスは話し言葉も含まれるが、Gutenbergコーパスは出版されたテキストの集合である。第3に、BNCコーパスは収録されたテキストの使用時期に幅がないのに対し、Gutenbergコーパスのテキストは執筆時期が分散している。これらの明白な非同質性にもかかわらずBNCコーパスを補完的に利用するのは、そのサイズの大きさと入手の容易さの故である。
5. 2音節形容詞のうち、単音節名詞に-y, -al, -ic, -ful, -lessがつく、あるいは単音節動詞に-ingがつく語が多い。これらの接尾辞は生産的であるため、派生される形容詞は開いた類となる。2音節形容詞をすべて網羅することは理論的にもできないので、今回は手元の辞書（小稲義雄（編）1980、『新英和大辞典第5版』、研究社出版）を参照して主要と思われる語を選定した。慎重を期したつもりであるが、思わぬ見落としがあるかも知れない。
6. 検索プログラムは今回AWKとJavaというプログラム言語で作成されている。いずれのプログラムでも、検索する文字列を柔軟に指定できる正規表現（regular expression）を利用している。たとえば、cruel, tranquilなどの比較級、最上級のつづりは、随意的に語尾のlを重ねることがある。また、cosyにはcozyという変異形がある。これらの変異形も含めて、比較級と最上級両方の検索を一度に行うには、検索文字列を(i)のように指定すればよい。

(i) a. $[\wedge a-z] \text{cruel?}(\text{er}|\text{est})[\wedge a-z]$

b. $[\wedge a-z] \text{mo}(\text{re}|\text{st})\text{co}[\text{sz}]y[\wedge a-z]$

また、大文字、小文字の区別を無視するモードで検索を実行することにより、Cruelst, CRUELERのような例も漏れなく検索することができる。正規表現の詳細についてはFiedl（2003）を参照されたい。

7. 検索でヒットしたデータの中に不適切データが混入していることもありうるので、目視によるチェックを行う。たとえば、屈折比較級と同形の名詞（foreigner, openerなど）や固有名詞（Hillier, Messier, Rosierなど）や、kindly, cleanly, lowlyでは同形の副詞の用例を除去する必要がある。もうひとつ、Gutenbergコーパスに特有の問題は、出典ファイル名が異なるのに全く同じ文が検索されることがある。これは、同一の作品が単行本と全集、あるいはアンソロジーなど、複数の出版物に収録されているために生じる。この問題に対処するために、Gutenbergコーパスを検索した後、検索結果に対していわゆるuniq処理を実行した。
8. 表中の横線は当該年代区分における使用回数が10回未満であることを示している。そのような場合、統計学的にはイエーツの補正を行うことが推奨されているが、山内（1987）などではその妥当性に対する疑義も出されている。ある年代区分における使用頻度が極端に少ないと、その年代の差異係数の値がある特定の著者による個人的な好みによって大きく影響される恐れがある。今回の調査ではこのような状況では敢えて差異係数を算出しないことにした。ちなみに、どの年代区分においても

- 差異係数を算出できなかったのは、372語のうち47語（12.7%）であった。
9. 分散分析に先立ち、ハートレイの F_{\max} を使って分散の等質性の検定を行った。その結果、最大分散と最小分散の比は $F_{\max} = 2.11$ となり、等分散とは言えない。しかし、山内（1989）が指摘するように、データ数が十分に大きく、各群のデータ数が大きく異ならないので、等分散の仮定が犯されても分散分析の結果に大きく影響しないと判断した。
10. 母音で終わる2音節形容詞で主要なものは thorough のみである。
11. 音節数は比較形式選択の際の有力な条件ではあるが絶対的な基準ではない。1音節であっても迂言比較が使われる形容詞（たとえば、right, wrong, real など）もあるし、逆に、3音節以上の形容詞でも屈折比較が使われる例が見られる。
- (i) heavenly, slovenly, womanly, unhappy, unlikely, ignoble
- (i)の他にも、書き手の個人的な好み、韻文における文体上の要請、無教養の象徴としての意図的な使用などの理由で3音節以上の語でも屈折形が使われる場合が散見される。
12. 表5において、BNCコーパスにおける than 表現の使用が顕著に減少していることが注目される。これがBNCコーパスとGutenbergコーパスの異質性によるものなのか、20世紀後半という年代に起因するものなのかは不明である。いずれにせよ、BNCコーパスにおいても迂言比較の方が屈折比較よりも than と共起し易い点では他の年代と共通しており、本論での主張に影響するものではない。
13. 形容詞の中には用法によって意味が異なるものがある。たとえば、sorry の限定用法では、(ia) のような屈折比較が多く見られるが、(ib) のような迂言比較はまれである。注15も参照。
- (i) a. But in the sorriest wreck there is usually some small chance for salvage.
(F. Lynde (1856-1930), *The Grafters*)
「しかしもっとも哀れな難破船にさえもわずかな救助の望みがたいていあるものです。」
- b. It is a most sorry place, with scarce a vestige of vegetation upon its surface, ...
(J. Corry (1807), *Observations upon the Windward Coast of Africa*)
「そこはとてもみじめな場所で、地表にはわずかな草木さえ生えていない。」
14. 叙述用法を検索するプログラムにおいては、比較形式の直前の語が(i)に挙げた不完全自動詞（変化形を含む）である場合、あるいは直前の語が(ii)に挙げた副詞である場合にはさらにその前の語が(i)の不完全自動詞である場合に、叙述用法であると見なした。
- (i) be, get, grow, become, prove, feel, look, sound, seem, appear, come, go
(ii) now, then, not, much, even, rather, far, ever, always, still, indeed
- 検索から漏れる叙述用法の例が出てくるのはやむを得ないが、それは全体から見るとわずかである。
15. 2音節形容詞のうち、(i)は叙述的にのみ使われる語、(ii)は不定詞、動名詞、that 節などの補文を伴って叙述用法でよく使われる語である。これらの形容詞では圧倒的な比率で迂言比較が使われる。このことも、叙述用法が比較形式の選択に強く影響することを示している。
- (i) alone, aware, afraid, alive
(ii) certain (= sure), ready, worthy, likely, aware, afraid, ...

参考文献

- ガイ・アシュトン&ルー・バーナード（2004）『コーパス言語学への誘い：The BNC Handbook』、東京：松柏社。
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad, and E. Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, London: Longman.
- Fiedl, J. (2003) 『詳説正規表現 第2版』、東京：オライリー・ジャパン。
- 福田 薫（2006）「現代英語における2音節形容詞の比較変化形式の使用分布」、『函館英文学』第45号、51-64。
- 中尾 俊夫・児馬 修（1990）『歴史的にさぐる現代の英文法』、東京：大修館書店。
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Oxford University Press.
- 斉藤 俊雄・中村 純作・赤野一郎（編）（1998）『英語コーパス言語学：理論と実践』、東京：研究社。
- 八木 孝夫（1987）『程度表現と比較構造』、東京：大修館書店。
- 山内 光哉（1987）『心理・教育のための統計法』、東京：サイエンス社。

（函館校教授）

資料：主要2音節形容詞の比較形式の年代別使用比率（差異係数） (a p < 0.001, b p < 0.01, c p < 0.05)

調査項目	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)	調査項目	1501-1700	1701-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	BNC (1994)
able	0.01	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	crazy	-	-	-	-	-	-
absurd	-0.79	-0.96	-0.83	-0.81	-0.86	-0.81	creaky	-	-	-	-	-	-
acid	-	-	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	creamy	-	-	-	-	-	-
active	-1.00	-1.00	-0.99	-1.00	-0.99	-1.00	crooked	-	-	-	-	-	-
acute	-1.00	-0.66	-0.42	-0.33	-0.58	-0.95	crucial	-0.74	-0.66	-0.67	-0.42	-0.28	-0.45
afraid	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	-0.99	-1.00	curly	-	-	-	-	-	-
airy	-	-	0.04	-0.37	0.42	-	cursed	-	-	-	-	-	-
alert	-	-	-0.91	-0.90	-0.95	-0.96	dandy	-	-	-	-	-	-
alien	-	-	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	deadly	-0.18	0.15	0.13	0.07	0.93	-0.16
alive	-	-1.00	-1.00	-1.00	-0.93	-1.00	decent	-0.76	-0.96	-0.72	-0.65	-0.53	-1.00
alone	-	-	-1.00	-0.97	-1.00	-1.00	direct	-0.80	-0.91	-0.92	-0.85	-1.00	-1.00
ample	0.00	-0.47	0.02	0.33	0.35	-0.67	dirty	-	-	-	-	-	-
angry	-1.00	-0.91	-0.48	-0.16	0.14	0.13	distant	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00
ardent	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	distinct	-1.00	-0.97	-0.92	-0.88	-1.00	-1.00
aware	-	-	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	divine	-0.24	-0.49	-0.45	-0.49	0.51	-
awesome	-	-	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	docile	-	-	-	-	-	-
awful	-1.00	-1.00	-0.94	-0.78	-0.86	-1.00	doggy	-	-	-	-	-	-
awkward	-	-0.86	-0.94	-0.92	-0.86	-1.00	dotty	-	-	-	-	-	-
basic	-	-	-	-	-	-	doubtful	-1.00	-1.00	-1.00	-0.97	-1.00	-1.00
basically	-0.83	-	-	-0.08	-	-	dreamy	-	-	-	-	-	-
batter	-0.42	0.01	0.30	0.28	0.26	-0.38	dreary	-0.47	-0.04	-0.04	0.30	0.36	0.69
blessed	-0.98	-1.00	-0.84	-0.87	-0.94	-1.00	dressy	-	-	-	-	-	-
bloody	-	-	0.13	0.28	0.44	0.42	dumpy	-	-	-	-	-	-
bony	-	-	1.00	0.98	0.93	-	dusky	-	-	-	-	-	-
boring	-	-	-	-	-1.00	-0.97	dusty	-	-	-	-	-	-
bossy	-	-	-	0.02	0.19	1.00	eager	-0.92	-1.00	-0.96	-0.95	-0.95	-0.95
branny	-	-	-	1.00	0.79	-	early	0.89	0.90	0.99	1.00	1.00	1.00
braven	-	-	-	-0.93	-0.85	-	earnest	-0.91	-1.00	-1.00	-0.99	-0.99	-
breezy	-	-	-	0.60	0.65	-	earthly	-	-	-0.11	-0.61	-0.56	-
brittle	-	-	-	-0.87	-0.67	-1.00	earthly	-	-	-	-	-	-
bulky	-	-	-	0.02	0.19	1.00	easy	0.37	0.39	0.64	0.86	0.93	0.99
bustle	-	-	-	1.00	0.85	-	empty	0.64	-	-	-	-	-
bustling	-	-	-	-	-	-	even	-	-0.85	-0.95	-0.91	-0.88	-1.00
canid	-	-	-	-1.00	-1.00	-	evil	-	-	-1.00	-0.90	-0.94	-1.00
careful	-	-	-	-0.95	-0.98	-0.99	extreme	0.57	0.39	0.38	0.04	-0.24	-0.96
certain	-0.94	-0.99	-1.00	-0.99	-0.99	-1.00	extreme	-0.91	-0.97	-0.98	-0.99	-1.00	-1.00
chalky	-	-	-	-	-	-	famous	-	-	-	-	-	-
cheery	-	-	0.73	0.47	0.54	0.75	fancy	-	-	-	-	-	-
childish	-	-	-1.00	-1.00	-0.94	-	fatal	-	-	-	-	-	-
chilly	-	-	-	0.56	0.85	-	feeble	-0.24	0.17	0.61	0.67	0.60	0.33
civil	-	-	-	-	-	-	fervent	-0.87	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00	-1.00
clammy	-0.19	0.00	-0.49	-0.53	-0.75	-1.00	fiendly	-	-	-	-	-	-
classy	-	-	-	-	-	-	fierce	0.23	0.65	0.83	0.84	0.82	0.71
classy	-	-	-	-	-	-	fierce	-	-	-0.64	-0.56	-0.54	-
cleanly	-	-0.50	-	-0.48	-0.50	-	flap	-0.30	-	-	-	-	-
clever	-	0.75	0.72	0.80	0.78	0.68	flashy	-	-	-	-	-	-
cloudy	-	-	0.13	0.27	0.36	0.58	flimsy	-	-	-	-	-	-
cloudy	-	-	-	-	-	-	fluent	-	-	-	-	-	-
cocky	-	-	-	0.25	0.35	0.22	fluffy	-	-	-	-	-	-
comely	-0.49	-	-	0.14	0.03	-	fluid	-	-	-	-	-	-
common	-0.31	-0.32	0.00	0.14	-0.02	-0.60	foggy	-	-	-	-0.90	-1.00	-1.00
complete	-0.74	-0.66	-0.70	-0.63	-0.54	-0.97	foolish	-0.71	-0.77	-0.63	-0.73	-0.74	-1.00
complex	-	-1.00	-1.00	-0.99	-0.98	-1.00	foreign	-	-	-	-	-	-
concise	-	-0.85	-1.00	-0.78	-0.87	-1.00	formal	-	-1.00	-1.00	-0.99	-0.99	-1.00
concrete	-	-	-	-0.87	-0.91	-1.00	fragile	-	-	-1.00	-0.96	-0.94	-1.00
conry	-	-	-	-	-	-	friendly	-0.74	-0.80	-0.71	-0.42	-0.25	0.02
correct	-0.91	-0.89	-0.91	-0.90	-0.93	-1.00	frothy	-	-	-	-	-	-
costly	0.00	-0.62	-0.44	-0.18	-0.30	-0.42	fruity	-	-	-	-	-	-
courtly	-0.67	-	-	-0.88	-0.46	-0.35	funny	-	-	0.87	0.92	0.89	0.91
cosy	-	-	0.78	0.52	0.64	-0.87	furry	-	-	-	1.00	1.00	1.00
cranky	-	-	-	-	0.82	-	gangly	-	-	-	-	-	-

